第１章　学級経営よもやま話
第７節　生活綴り方の伝統

生活綴り方などと言うと、国語教育の範疇と思われるかもしれません。私にとっての生活綴り方は、学級通信とともに児童理解や学級集団づくりの重要なアイテムでした。「学級通信」や「生活綴り方」を「学級経営」の章で取り上げているのはそのためです。

この節は、
■生活綴り方の伝統に学ぶ■
■常日ごろの綴り方(日記)指導■
■計画的な綴り方(作文)指導■
の３つの項から成っています。

■生活綴り方の伝統に学ぶ■

１　生活綴り方とは

ここでは、「生活綴り方」とは何かということを紹介する。一言で言えば、それは、東北の土の匂いの中で育まれた教育の営みである。

生活綴り方夏期講座・第１回　**生活綴り方とは**

「教育雑記帳」№.９４(1988.7.18)

国分一太郎著の『生活綴方事典』(明治図書）には、次のように生活綴り方が定義されている。

生活綴方とは、生活者である子どもたち（または、おとなたち）が、外界の自然や社会、人間の事物、または自他の精神の内部にふれたときに考えたことや、

感じたこと、つかみとったものを、それが出てきたものである事物の形や動きとともに、ありのままに具体的にいきいきと文章に表現したものをいう。この際生活綴方に「生活」という限定詞を加えるのは、生活者が書くからであり、「綴方」といわれるのは、大正のはじめ以後わが国の民間教育運動のなかで育ったリアリズムの綴方の伝統・遺産をうけついだ性格の表現をとらせるからである。また、この生活綴方の作品では、自分のものとなったコトバ、体験に裏づけられたコトバで書かれることをことのほか大事にする。

つまり、生活文即生活綴り方ではない。生活綴り方とは、生活者が自分のものになった言葉で書く、リアリズムに徹した作文だと言える。また、書くという仕事を単に表現の指導だと短絡的にはおさえない。そして、ひとまとまりの日本語の文章をかかせる手順については、厳しい条件を要求する。書くものの本質や、相互関係的意味とねうちを見出すこと､事実にもとづいた思想・感情はもちろん、書き手である子どもたちの観察力・想像力・思考力をのばすとともに、ある種の固定観念や偏見などから解放して、自由で個性的な自我を確立させ、人間的な社会的連帯感を養うことまでめざすのである。

生活綴り方夏期講座・第２回　生活綴り方の起点

「教育雑記帳」№.９５(1988.7.20)

生活綴り方について考えるとき、その背景として**北方性教育**に触れておく必要がある。

北日本国語教育連盟「北方性とその指導理論」(『綴方生活』1935 年 7 月号)には、次のようにある。

「暗い空の下で、やせた土地をかかへて、しかも愚鈍に生きて来た幾世紀の地方の歴史は、時代といふ現実にはげしい苦難を与へられた。しかもこの第一の苦難は、肉体的なもので、極端な経済窮乏の形をとってあらはれた。次に来るべき当然の受難は、思想の問題でなければならない。」そこで、教師たちは、「うそでない事実、眼前の考え方、生き方を止揚することによって、より健康な、より明朗な生活へ前進する新興生活教育運動の一翼として態度」しようとする。そして、いう。

……北方の子供たちは、北方の文化を開拓する一歩前進への散兵だ。私達はこの散兵を指揮しなければならない。私達の標準は、正しい社会発展への明確な角度として散兵の協働性を要請する。北方の生活台に立って、北方の子供らしい生き方がこの地帯の生活性としての協働の役割となって来るのである。先づ私達は、

北方の子供たちにはっきりとこの生活台を分らせる。暗さに押し込める為めではなく、暗さを克服させるために、暗いじめじめした恵まれない生活台をはっきり分らせる。分ったために出て来る元気はほんたうのものであると私達は考へてゐる。……

・国分一太郎「綴る前の指導略図」(『工程』1935 年 9 月)

生活から学び、生活を大事にし、生活の眼をひらき、生活の姿勢を正し、生活を深め、生活を進める、常住不断の教育営為を「綴る前」の指導というゆえんは、イ、何にこそ感動したらいいかーー生活感情の豊かさと深さを、ひろめ、ふかめる仕事である。ロ、何をこそ求めたらいいかーー生活態度の前進・昂揚の迫力をます指導である。ハ、イとロとは、「何を」観察し、反省し、行動するかを教えて、表現に際しての、細心な観察と、厳しい反省と強い断定をもたらす。

生活綴り方夏期講座・第３＆４回　生活綴り方の伝統

「教育雑記帳」№.９７(1988.8.2)
「教育雑記帳」№.９８(1988.8.3)

生活綴り方教育の実践者が伝統的に大事にしてきたこと

生活綴り方の実践者たちはひとりひとりの子どもたちを固有名詞で生き生きとしてとらえてきた。学校・学級や家庭・地域の子どもについて語る時、生活綴り方の実践者たちは、子ども一般としてではなく、だれそれはいつこうだった、だれさんはこういうふうにしてものを語りかけてきたと、いつも、ひとりひとりの固有名詞を出して、子どもについて語ってきた。それは、ある日ある時のひとりひとりの子どもたちの動きやすがたを、その心のなかのことまでふくめて、しっかりととらえ、教師の心のなかに深く刻みつけているためである。子どもをとらえるというとき、ある日ある時、あるところで、ある状況のなかで、どの子どもがどうしたかということを具体的なかたちでつかみとることなしには、本当に子どもをとらえることはできないという、教育におけるリアリズムの精神をしっかりと身につけているからである。

②　生活綴り方の実践者たちは、ひとりひとりの子どもたちを国や地域の現実・環境のなかの存在としてとらえてきた。子どもたちもまた社会的、歴史的な存在としての人間であるからには、ひとりひとりのすがたや動きのは何らかのかたちで周囲の影響をうけて生きている。だから、子どもたちのすがたや動きのなかにはそのときどきの国や地域の政治・経済・社会・文化などの影響がさまざまな形

で反映されてきている。子どもたちの書く綴り方をとおして、それをたしかにつかみとるこみとを生活綴り方のよき伝統のなかから正しくうけついできたのである。国と地域や子どもたちの人間関係について語る時にも、それを子どもたちの具体的な動きやすがたをとおしてつかみとることもできるのである。子どもを総体としてつかむことはまさしく生活綴り方の実践者たちが実践のなかで自分たちのものにしてきたことであるといってよい。

③　生活綴り方の実践者たちは、ひとりひとりの子どもたちを、子ども集団のなかの個人としてとらえてきた。子どもたちを生き生きととらえるということは、子どもをとりまく環境のなかでとらえることであるとすれば、直接子どもたちが仲間入りしている子ども集団のなかのひとりとしてしっかりとらえることはいっそう大切なことである。学級集団、学校集団、地域での子ども集団のなかでどういう存在なのか、どんな影響を、どういうかたちでうけているのかをつかむことが、より子どもを理解するのにつながることだということを、実践のなかで知っているからである。また、そのことは、子ども集団がどういう質の集団であるかをもしっかりとらえることをぬきにできないことも知っている。

④　生活綴り方の実践者たちは、ひとりひとりの子どもを生活者、学習者として日に日に自己を発達させていくものとしてとらえてきた。子どもたちは自然や社会や文化のなかで生活者としても、学習者としても、生きている。そのなかでさまざまな働きかけをしたり、働きかけをうけながら発達していくものである。程度の差はあれ、みずからの主体をはたらかせ自己発達をとげていくものである。そのため、わたしたちは、「あそび」のなかで、「労働」のなかで、「文化的欲求」をみたそうとするなかで、「学習」のなかで、自己を発達させようとしているものとして、子ども・青年をとらえてきた。今日のような子どもをめぐる自然や社会や文化の状況のゆがみがきわだっているときにも、われわれ生活綴り方の実践者たちは、子どもの発達可能性に期待をかけて子どもたちをとらえていこうとする。状況への悲観的思いをつのらせながらも、子どもたちは日に日に自己を発達させていく主体として子どもをとらえていくことにいささかのためらいも抱きはしない。

⑤　生活綴り方の実践者たちは、ひとりひとりの子どもの感性、感情の内面にまでくいこんでとらえてきた。文章表現という行為は、子どもたちの意識や感情の働きと無関係なところでおこなわれるものではない。そのため、生活綴り方をとおしてひとりひとりの子どもたちの感性、感情の内面の動きについてたえず敏感に感じとりながら、その内面の深くにしみこむような働きかけをしてきた。その

ことが、子どもたちの豊かな表現を導きだすきめ手だとも考えられてきた。したがって、生活綴り方の実践者たちは、たえず、ひとりひとりの子どもたちの感性、感情の内面まで深くくいこむような働きかけに心をくだいてきた。そこから「心の琴線にふれる」とか、「心のひだにくいこむ」などという生活綴り方特有の指導語までを生むにいたった。子どもを生き生きとつかむということは、子どもたちのうわべのすがたや動きだけでなく、その内面にまでくいこむようなこまやかなとらえ方をもふくめてのことであることを、われわれ生活綴り方の実践者たちはよく知っていたのである。

生活綴り方夏期講座・第５回　生活綴り方の伝統

「教育雑記帳」№.１０６（1988.8.18）

忘れえぬ生活綴り方

母の仕事とくらし　　５年　国本理恵（1980.11）

「ピポパプポ。プルルルル、プルルルル。」
「もしもし、松五郎です。」
音楽といっしょにおみせから父の声。いつもの家の声より元気のいい声だ。
　わたしは、
　「おかあさんにかわって。」
と、言った。父は、
「ちょっと、まつごろう。」
と、言った。
　それから、母がでんわに出るまでまっていると、いろいろな声が聞こえてくる。音楽がながれている。
「いらっしゃい。ありがとうございました。」
これは父や母の声。
「どうや、こうや、アハハ。」
これは、お客さんの声。音楽にまざってたくさん聞こえてくる。その横で母もわらっているみたいだ。お店にいなくても声や音だけで、様子がうかんでくる。お店の中は、てってもさわいでいるみたいだ。母もわらったりしているれど、手をはやくあっちこっち動かして、お客さんにたのまれたものをつくっているだろう。お客さんとしゃべりながら、しゃべられながら。
　だが、お客さんがしゃべりかけてきているのに、むしするわけにはいかない。いろんなはなしをされるだろう。うれしかったはなし、いやだったはなし。うれしかったはなしをすれば、お客さんも母もたのしいだろう。いやだったはなしをすれば母はききづらいかもしれないけど、お客さんはすっとするだろう。母は、お客さんにたのまれたものをつくるだけじゃなくてお客さんの心をすっとさしてあげているんだ

な。

父と母がやっているお店というのは、のみやみたいな店だ。店がはじまるのは、夕方の５時で、おわるのは、夜中の１時ごろだ。ふつうの家では、おとうさんたちが帰るころに出て行く。

だから、オフロをわかすのにもこまる。私たちでできないことがあるときにもこまる。

でも、そこで私ががんばらなければならない。家のかたづけ、お茶わんあらいなどたくさん仕事がある。

どうしてこんな苦しい仕事にかわらなければならなかったのだろう。今の仕事は、私が１年生のと中ぐらいからはじめた。天理にきたのも１年生のと中だった。それまでは、奈良にいて、父はふつうのサラリーマンで母もつとめていた。

私ははっきりとおぼえていないけど、母は、

「今よりようち園の時の方がようお手伝いやってくれたで。」

とか、

「弟のめんどうもみてくれたしよかったわ。」

と、あてつけるように、お茶わんをあらいながらいう。わたしは、

「うん、そうかな。」

と思って、ちょっとはずかしくなる。

でも、あそびたいし、ならいものもある。

でも、日曜日はかかさずげんかんのはきそうじをしている。奈良に住む前は、かご島に住んでいて、父と母は、メナードけしょう品の仕事をしていた。その時は、生活が苦しかったそうだ。わたしが赤ちゃんの時だから、１階で仕事をしていると、私が２階で大きな声でないて、いつも１階、２階、１階とのぼったりおりたりしていたそうだ。その生活の苦しい時に、父は交通事故で入院をしたそうだ。それで母１人でまだ赤ちゃんの私と弟を育てていけないので、わたしだけかご島から天理のおじいちゃんの所へひきとられたのだそうだ。その時は、わたしも母もすごくないたそうだ。わたしは、まったくおぼえていない。かご島でやっていたメナードけしょう品の仕事から、奈良にきたのは、生活が苦しかったからだろう。奈良から天理にきたのは、家をひっこししなければならないようになったからだろう。

今の仕事になって、父も母も帰ってくるのがおそくなった。

私は、ある日の夜中の１時半ごろ目がさめてトイレに行った。すると、「トン、トン、トン。」と、かいだんをあがってくるような音。

「ガチャ、ガチャ。」

かぎをあけている。母だ。私は、大きな声で、

「おかえり。」

と、言った。父は、

「まだおきてたんか。」

と、びっくりしたような声で言った。と、思ったら父と母は、

「おなかすいた。」

と言って、どてんとすわってしまった。もう目はとろんとしていて、すわりかたは、もうあかんというようななさけないすわりかただ。私は、台所に行ってお茶わんとおはし、それにれいぞうこにあるものを持ってきた。
　すると、父と母は、
「ありがとう。」
と言うと同時に、おはしをもって目をぎょろぎょろさせながら、よういをしている。私は、さっとお茶わんをとってごはんを入れた。父と母は、
「いただきます。」
と言ってから、いっせいにおはしでごはんを食べ始めた。
「おいしい。」
と、聞こうと思ったけど、手にはおはしをもって、おさらやお茶わんのうえで「カチャカチャ」なっている。目は、机の上で「ぎょろぎょろ」している。おそろしいぐらいすごいはやさで食べている。ごはん１ぱいなんて「あっ」というまだ。よっぽどつかれているんだなと思って見ていた。
　すると、
「ごちそうさま。」
といってからふとんでごろんとねてしまった。みていても目がまわりそうだ。

　もう、今の仕事になってから４年たつ。夜もなれてきた。
　学校から早く帰ってきて母がけしょうをしているのを見ていたら、かばんに薬が入っていた。わたしは、「あっ。」と思った。
　そして、私は、母に、
「なにその薬？」
と聞いた。母は、
「うん、ちょっとしんどいねん。」
と、ささやいた。私は、今までこんなことぜんぜんしらなかった。ときどき横になっている時があったけど、元気だとばかり思っていた。母がびょう院など行くようになったのは、仕事があんまりきついせいだろう。朝は、６時半におきて、ごはんの用意をする。そして８時ごろから 10 時までねる。それからそうじ、せんたく、ばんごはんの用意をすませる。そして、オフロにはいる。おけしょうをして、すぐお店に行く。５時から夜中の１時まで仕事。ねる時間は７時間だ。すごく少ないこともないけど、５時から１時まで立ちっぱなしだ。これじゃびょうきになるのもあたりまえかもしれないけど、びょうきになってほしくない。私だって、母の手伝いを少しでも多くしてあげれば、びょうきだってならないかもしれない。
　わたしは、どんなことがあるかとさっそく考えた。まあお手伝いはするけど、もっと母がたすかることってないかなと考えた。

　今日は、日曜日だ。お店も休みだし、学校も休みだし、「今がチャンスだ。」と思った。ばんになった。外は、もう暗い。「いそがなくっちゃ。」と思って、オフロにはいりながらも考えた。とうとうオフロからあがった。母をさがすと、もうふとんの中に入っている。
「あたりまえやろな、いつも帰ってき

てねるのは夜中の２時ごろになるから。」
わたしもふとんにはいって天じょうをにらみつけながら考えた。しばらくすると、母はうつぶせになって、
「あしだるいわあ～。」
と、しんどそうな声で言った。そこでわたしはひらめいた。
「マッサージしたろ。」
と、わたしは言った。母は、
「しんどなんで。」
と、言った。わたしは、まあええやんという気持ちで、さっそく始めた。はじめに足のふくらはぎを右手、左手、右手、左手とこうたいごうたいに早くかるくたたいてあげた。それからせなかのまん中の２本のすじを母のこしの所ぐらいにまたがって、主に親指を使っておしたり、うでをもんであげたり、首をもんであげたり、それをまたくりかえしやっていると、あせが流れてきた。「きにしない、きにしない。」と思いながらつづけた。すると、母は、目を半分つぶって、
「気持ちええわ、よられ出そう。しゅ～う。」
と、わかりにくい声で言った。

■　忘れられない綴り方であると同時に、忘れられない子どもである。1980 年、〇〇小学校は、県の研究指定を受けていた。11 月 17 日に発表会があった。ぼくは、生活綴り方の集団推敲の授業をした。生活綴り方なるものを指導主事は随分嫌っていたが、ぼく個人は指定を利用しつつ勉強できた。その授業の時に使ったのが、彼女の綴り方だった。家庭の中のことが出てくるということもあって、授業の数日前、母親に会いに行った。自分の一生懸命の生き方に誇りを持っている。そんな感じがした。授業は、滅多にないほどの出来だった。未だにそれを超えていないように思える。研究発表会の日の夕方、松五郎へ飲みに行った。

狭山集団登校の連帯参加第一号でもある彼女は、鋭い感性の持ち主だった。中学進学に関わって親との関係に亀裂が生じ、加えて、中学校に彼女の受皿がなかった。彼女は荒れた。喫煙、シンナー、異性交遊……・鑑別所で会った時の彼女の目は寂しかった。

表現と認識、そして行動の統一を言い続けてきたが、それは実に難しい。彼女の綴り方で言うなら、マッサージではなくて、生活の一部を担い切るところまで迫るべきだと思う。それができていないが故に中学校での荒れがあった。ぼくの弱さだ。

生活綴り方の伝統は、「日本作文の会」という民間教育団体に受け継がれ、発

展していった。当然、その中心に国文一太郎さんがいたことは言うまでもない。

2　生活綴り方とＰＩＳＡ型学力

ＰＩＳＡ型学力を強く意識した学習指導要領によって、国語科における「書く」活動も従来の作文とは様変わりした。従来から系統的な作文指導と言うにはあまりにも不十分なものであったのだが。

ＰＩＳＡ型学力というのは、論理的な「読む」「書く」力である。雑な表現だが、情緒的な読み書きから、筋道だった読み書きへの転換と言ってもよい。とりわけ「書く」活動では、自分なりの意見を持ち、それを分かりやすく発信することが求められる。「分かりやすく発信」するためには、論理的な（筋道だった）表現のスキルが要る。「まず結論を書く。その後に理由を書く」といった類いのスキルだ。

さて、分かりやすく発信ということに焦点が当てられがちであるが、大事なことが抜けている。何を発信するかという「中身」の問題だ。“自分なりの”という言葉は、実に都合のいい言葉だ。何だっていいのだという解釈さえ成り立つ。しかし、本当にそれでいいのか。

「自分なりの意見を持ち」に注目してみよう。「意見を持ち」の前段には、テキストやグラフなどを正しく読み取るという作業がある。そのためのスキルも必要だ。その上で、「自分なりの意見を持つ」ということになる。

どんな意見を持つかは、個々人の内面の活動だ。そこにはスキルなどない。では、教育は無為でいいのか。

生活綴り方は、内省つまり、自分の考えや行動を深く顧みることを大事にする。それは、事実をていねいに綴る指導と赤ペンによる励ましの積み重ねの上に育つ力だ。自分をしっかりと見つめられる子どもは、周りもよく見えるようになっていく。自分の考えを持てるようにもなっていく。私の浅い実践の中にでも、そうした子どもが幾人もいた。――この力こそ、「自分なりの意見を持ち」云々の基盤になるのではないか。私は、そう考えている。したがって、少なくとも低学年においては、論理的という前に事実を丁寧に綴る指導を、高学年においても並行しての指導を行う必要がある。

■常日ごろの綴り方(日記)指導■

「綴る」という学習は、「常日ごろの指導」と「計画的な指導」に分かれる。このうち、「常日ごろの指導」は、日記指導と学級通信(一枚文集)をセットにして取り組むのが一般的である。

日記指導をこのように　「教育雑記帳」№８０(1988.4.19)

■なぜ日記を書かせるのか

私たちが日記というとき、それは生活を綴るということを意味する。私たちは、生活者としての子どもが自らの生活台に立って、自分の生活を切り拓いていくことを願っている。生活綴り方はその重要な手段である。子どもたちにひとまとまりの文章を書く力をつけていくための日常的な耕しの場として日記がある。日常的な耕しとは、文章表現力をつけるということと、それ以上に重要な要素として、ものの見方・感じ方・考え方を育てるということである。つまり、一言で言うならば、子どものものの見方・感じ方・考え方を耕し、生きる力を育てていくために日記を書かせる(一般的にそういう表現をするのでそれにならっているが、個人的には書かせるという言い方には抵抗がある。)ということになる。

■何を書かせるのか

生活を綴るということは、単に生活を記録するということではない。よりねうちあるものへと生き方を高めていくねらいをもっているのだから、それに目を向けさせていかなくてはならない。具体的には…

①自分自身……自分を抜きにしたところでの日記など存在しない。何に取材しようとも、それと自分との関わりあいにおいて書かなくてはならない。その大前提の上に立って、自分がしたこと・見たこと・聞いたこと等の中からいつもと違うことを書く。

②ともだち(学級)……友だちのことで感心させられたことやみんなで考えたいと思うようなことがらを大事にする。

③家族……消費生活ではなく、労働やそれにつながる家庭での会話をこそ大事にする。自分が体を動かして働いたことも大事にしていきたい。

④自然……四季の移り変わりや、それと人間の生活との関わりを書く。

⑤社会……身近な問題や、高学年になってくれば世の中の動きについて、それと自分との関わりあいを大事にしながら目を向けさせていく。

■具体的な指導プラン

今回は、低学年を意識しながら具体的な展開を提案してみたいと思います。

(1) 一つのことに絞って書くことの指導

最初ですから、取材はもっぱら自分自身ということになると思います。そこで、次のような投げかけをします。

日記には、一日の中で　一番おもしろかったこと　一番おどろいたこと　一番悲しかったこと　一番頑張ったこと　一番楽しかったこと　一番くやしかったこと　一番忘れられないこと　一番困っていること　を書きましょう。

できれば参考になりそうな作品(その学級のものであればいうことなし。なければ以前自分の学級で書かれたものでもよい。それもなければ他人さまのものを拝借する。)をいくつか紹介してやると子どもにもわかりやすいと思います。そして、それからしばらくの間、赤ペンによる個人指導を続けながら子どもを励ましていきます。取材の広がりについてもちょっと赤ペンを。

(2) 順序よく書くことの指導

一つのことに絞って書く(国分さんは“えらばせる”という言葉でそのことを言っている。)ことが一定できるようになってきたら、展開的過去形で書くことを指導したいと思います。

日記でも作文でもいいですから、そのクラスの共通体験(○年生になった日のこと、視力検査の時のこと、みんなで花を摘みに行ったこと、２０分休みにあったこと、など)に取材したものを題材にして授業を組みます。

一人の子どもの作品をプリントして配ります(模造紙に書くのもよい)。まず、書き出しをどうするか決めます(場面の切り取り)。そして、その時のことを作者を中心にしながら順序よく思い出して書き足していきます。もちろん作者が思い出せないときは周りの子が援助すればいいのです。順序よく思い出して書くということが具体的にりかいできたところで、個々の作品の書き足しをします。

１時間の授業の後は、日常における個別の指導の繰り返しと、併せて時々共通課題の文章(日記でもよい)を書かせてみて紹介してやればいいと思います。

(補足)展開的過去形で書く指導……「したことをしたとおりに、見たことを見たとおりに、聞いたことを聞いたとおりに、時間の順序に従ってよく思い出して、過ぎ去りの形(過去形、でした・ました)で書く。」

入門期の文章表現指導講座①　「教育雑記帳」№８２(1988.5.2)

「入門期」というのは１年生と同義語ではありません。確かに、主として１年生の文章を書き始める時期の指導が中心になりますが、「やり直し入門期」の指導も含めて、ここでは「入門期」という言葉を使います。

「やり直し入門期」という言葉について少し触れておきます。いわゆる入門期の指導をしても、それがすべての子どもに定着していないことがあります。あるいはまた、時には入門期の指導がきちんとなされていないことだってあります。そうした子どもたちに対して、たとえ何年生になっていようとも、再度入門期の指導をしなくてはなりません。その中身についてはこれから徐々に触れていくとして、ともかくもそれを「やり直し入門期」というわけです。

４月２４日の授業と集団づくり講座・綴り方分科会での蔵本穂積さんの話を紹介します。

この言葉を聞けば蔵本さんの顔が浮かんでくるほどに言い続けられていることですが、入門期の目標は、すべての子どもに展開的過去形の文章が書ける力をつけることだと言われました。したがってまた、やり直し入門期のめざすところもここにあります。

えらばせるということを大事にしなければならないとも言われていました。よりねうちのあるものをえらばせるという中身については、ここではおいておきます。

話の中で興味深かったのは、ことばには内言語と外言語とがありますが、その両者の関係について触れられた部分です。内言語というのは、頭の中での思考の際に使われていることばをいいます。それに対して外言語というのは、表現として外に出てくることばや書きことば(文字)をいいます。そして、内言語が翻訳されて外言語になるのですが、この翻訳が子どもにとっては大人が思っている以上に困難な作業だというのです。なぜなら翻訳に使える辞書もないわけで、それはたくさん読んだりたくさん書いたりという経験によって自分のものになっていくものだからです。ですから、子どもに思ったとおりに書けというのはたいへんな暴言なのです。ところが実際にはこれがとても多いですよね。まず、子どもには事実をよく思い出して書くことを求めることから始めるのがいいのだということになるわけです。

入門期の文章表現指導講座②　「教育雑記帳」№８３(1988.5.7)

■天野里子さんの実践に学ぶ

(1)　絵日記から始める

蔵本さんが明かされた話によれば、天野さんは１年生の４月８日に日記帳を渡されるということである。これはマス目も罫線もない白いノートだそうで、ここに子どもたちは絵で日記を書いてくるのだそうだ。ぼくは、絵日記というのは上に絵を描いて下に文を書くものと思い込んでいたのだが、なるほど絵だけでも立派な日記になるわけだ。そして、１日に何人かの子どもの絵から聞き取ったことを文字にして入れてやるのだそうだ。何日か続ける中で絵の変化を大事に聞いてやって、それを文字にしてやるということもするらしい。

(2)　展開的過去形で書く

展開的過去形で書く力をすべての子どもに…(省略)

(3)　会話文を入れる

展開的過去形の文章を書かせる中で、会話文を入れる指導をしていく。まず、２人でごっこ遊びをして(例えば、一人がお店屋さんになって、もう一人がお客さんになる)、双方のやりとりを「　　　　」に入れて書き取っていく。それができるようになると、次には３人で同様のことをする。つまり、２人の会話を第三者的に聞き取って、“○○が「……」と言いました。”という形の会話文に書く練習をするのだそうだ。

(4)　題名を付けさせる

１年生の３学期ごろになると、日記にも題名を付けさせる指導をするそうだ。これは、場面を切り取るということで、文章の書き出しとかかわって大事なことらしい。

(5)　その他

天野さんは年に４回ほど版画に取り組まれている。日記から場面を選び、版画文集を作られている。５月には最初の文集ができるというからすごい。

※講座③以降省略

以上のように、「常日ごろの指導」においては、文章表現力とともに価値観(ものの見方、考え方)を育てることを大事にする。

生活つづり方と文学の会　第１回学習会

１９９５．６．７

生活つづり方実践入門講座（１）

日記指導をどうするか

１．日記をなぜ書かせるのか

２．どのように書かせていくのか

３．赤ペンをどう入れるか

「生活つづり方と文学の会」という有志の学習会で使ったレジュメと資料です。
手書き時代の通信なので読みづらいと思いますが、おつきあいください。

資料中の「人の世に熱あれ」という通信は、当時の勤務校で同和教育推進教員をしていた時に職員向けに発行していたものです。

人の世に熱あれ　【No.59】1994．11．7（月）
編集&発行：天理市立[redacted]学校相談室

「生活綴り方事始め」(1)

思うところあって、「生活綴り方事始め」シリーズを発行させていただくことになりました。今なぜ生活綴り方なのかについては後日触れたいと思いますが、とにもかくにも実践講座の始まりです。一まとまりの綴り方が水面に浮かぶあひるとすれば、これは水面下での水かきにあたる部分です。そうしたつもりでお読みください。

《ネタを集めること、そして選ぶこと》

取材指導と一般に言われています。たとえば「取材ノート」や更紙1/4程度の「取材カード」を持たせて、1日の生活からいくつものネタを集めさせます。これだけでも生活への目の向け方がずい分変わっていくものです。

いくつかのネタの中から、日記に書くことを一つ選ぶ。これがとても大事な仕事なのですが、最初はあまり注文をつけずに下にあるような基準で選ばせましょう。しばらく続けていくと、朝起きてから寝るまでの日記は姿を消していくはずです。

（資料として少し古いのですが「野辺花」という一枚文集を使います。
少しでも参考になればいいのですが。）

1988年 4月19日（火）No.3
野辺花
天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人／草尾佳秀

日記を書こう
自分をしっかりと見つめて生きていこう

自分を高めるために日記を！

なにげなく生活をしていると　なにげなく毎日がすぎてしまう。一見、同じことのくり返しに見える毎日でも、私たちはその中でいろんな発見をしたり、いろんな出会いをしたりしているものです。だけど、人間というのは悲しいもので、その時の感動がどれほど大きくても、時間がたってしまうとわすれてしまうんですよね。一日の終わりにその日の生活をふり返り書きとめておく。そのつみ重ねがきっとあなたの心を成長させてくれると信じます。ぼくは、みんなに自分の意見を持てる子になってほしいと思うし、それを自分の言葉で表現（書く・話す）できる子になってほしいと思います。そのためにこそ、自分をしっかりと見つめる子になってほしいと思います。どうか、書き続けて下さい。ぼくもまた、みんなとともに歩みたいと思うから、この『野辺花』を書き続けようと思っています。

一日の生活から一つのことを選んで書こう。

日記には一日の生活から一つのことをえらんで書きます。もう少しわかりやすく言うと、一日の中で、

- 一番うれしかったこと
- 一番悲しかったこと
- 一番くやしかったこと
- 一番たのしかったこと
- 一番がんばったこと……

を、一つだけえらんで書くのです。

※どんなことを書くのか、どんなに書くのかということについては、もう少しあとに勉強します。

「生活綴り方事始め」1の2

取材メモ　（11月8日）
5の1　名前 角谷幸美

テニスの試合で松丸さんとくんで6年にかった！

- 体重そく定はいやだ
- ナップサックを手ぬいするときしんけんにやった
- ミシンぬいがめちゃくちゃになった
- テストにちょっとじしんがある
- テニスの試合で松丸さんとくんで6年にかった

How to 取材メモ

5年生でさっそく取材メモを作ってくれました。左にあるのがその実物です。5つほどネタをみつけて、日記に書く1つを選んで「名前」の下の枠のところへ書くようになっています。初日の様子を聞いてみると、ダラダラ日記がなくなり、ある子などこれまでにない長文になったそうです。

小さい学年でやるときは、5つ分の区切りをしておいてやる方がいいかもしれません。そして、やがてなれてくれば、日記のページのはじめに「取材メモ」のらんをとってもいいだろうし、さらになれてくれば必要なくなるだろうと思います。

なお、ネタを見つけにくい子には、友だちの取材メモを紹介してやり、選びにくい子には先生が○印をつけてやるのもいいでしょう。

地域のニュース　1994年（平成6年）11月8日（火曜日）　毎日新聞　（第3種郵便物認可）

「無法松の一生」で"無法"訴え

カット部分はシナリオ朗読

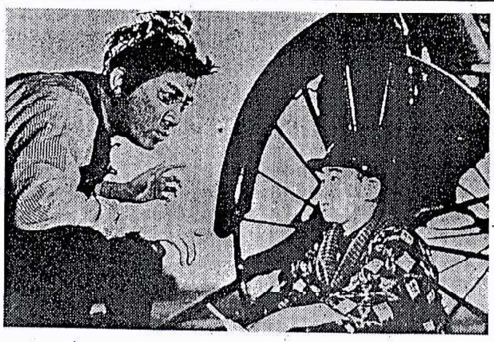
19日に五条で上映

戦中・戦後、国と占領軍による二度の検閲でカットされた映画「無法松の一生」を上映し、カット部分はシナリオを朗読して反戦平和、人権を考える会が十九日、県内では初めて五条市の市民会館で開かれる。同市同和教育研究会の主催。カットすることで表現の自由を奪い、人間性がゆがめられた時代を浮き彫りにする。

「無法松の一生」は、福岡県生まれの作家、岩下俊作（一九〇六－八〇）が一九三九（昭和十四）年に「富島松五郎伝」の原作名で発表。明治の九州・小倉を舞台にし、人力車を引く主人公の松五郎と軍人の未亡人母子の温かく、物悲しい物語。

映画は四三（昭和十八）年の製作。当時は検閲で国が十分、戦後になると占領軍がさらに八分カットした。松五郎が未亡人に抱く恋慕の情は軍国時代には否定され、子供の歌う唱歌「青葉の笛」は平家の落人を歌ったものとして切られた。

十八分間分のフィルムは処分された。この映画の上映会は七年前から、全国で二十回以上開かれてきた。十九日は「無法松の一生」（一時間十五分）を上映後、映画評論家の白井佳夫さんの講演、続いて白井さんと女優のカット場面のシナリオ朗読などがある。開演は午後一時半。参加協力費千五百円。



1943年製作の「無法松の一生」の一場面

「無法松の一生」を見ながら同和研修を!!

昨年の全同教大会（大阪）で好評だった「無法松の一生」を五条市で見られます。11月19日、富田小へ行かれない方、参加してみませんか。（草尾のオススメ作品です）

人の世に熱あれ　【No.62】1994．11．11（金）
編集＆発行：天理市立[redacted]小学校相談室

「生活綴り方事始め」（2）

《くわしく書くということ》

ぼくたち教師のきまり文句の一つに、「くわしく書きなさい」というのがあります。きっとみなさん自身も子どもの時に耳にタコができるほどそう言われ、それは長い作文を書けということだと理解し、先生に満足してもらうのに苦労した経験がおありでしょう。そして、月日が流れて、教師として子どもの前に立った今‥‥。

今回の結論を先に言います。「くわしく書くというのは、しっかり思い出して、それを(時間の経過にそって)順序よく書くことなんだ。そのときに話したことばや表情、声の調子、体の動きやまわりの様子などを書くといいね。」ってことになるでしょうか。大阪の蔵本さんがしきりに言われている"展開的過去形"の文章を書くというのも同じです。補足すれば、したことをした通りに、見たことを見た通りに、時間の順序にそって過ぎ去り(過去形)の文章で書くということです。

さて、問題はどうやってその力をつけるかということです。

下の資料は、日記のネタを広げることを意図して出したもの(この年きちんとした取材指導をやってなかった)ですが、あわせて記述指導を行っています。子どもはよく下のような説明風の文章を書きます。これを展開的過去形の文章にしたいのです。同時に、他のみんなにも展開的過去形の実際を学んでほしいので

1988年4月28日(木) No.10.

野辺花

天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人／草尾佳秀

家でのくらしや働いたことを書こう

休みの日が多い時だからこそ…

☒ お母さんの仕事（四月二十一日）　上木奈生子

お母さんは、おうちで内しょくをしています。ミシンでぬったりそろえたり…。一番初めは前の部分と後ろの部分がばらばらで、それをわたしとお母さんが前と後ろに分かれて、前と後ろをくっつけさせて、おかあさんがそれを三日ぐらいかかってそでぐちやえりのところとかをぬいます。わたしは、うらになっているのをおもてにむけたり、一番最後のきれいにたたむのをしたりします。お母さんは、ラジオを聞きながらします。わからない言葉とかをラジオの人が言っていたら、きいたりします。

▨ ぼくの母親もずっとミシンの内職をしていました。ポロシャツのえりつけをしていた時もあるし、スカートの仕事をしていた時もありました。やっぱり上木さんのお母さんと同じようにラジオを聞きながら。急ぐ仕事の時なんかはずい分夜おそくまで仕事をしなくてはなりません。ぼくも子どものころはよく手伝いをしていました。

▨ "くわしく書け"とか"様子がわかるように書け"とかよく言われます。一体どうすればいいのでしょうか。この文章をつかって勉強してみたいと思います。

▨ ところで、日記を続けて書いているでしょうか。書いている人は、一度自分のノートを読み返してみて下さい。どこかへ行ったことと、○○さんと遊んだこと、○○をして遊んだことというのがずい分多いと思いませんか。それが悪いとは言いません。でも書いていても、どうもつまらないなあと思うようになってきているのではないでしょうか。遊んだことを書くのじゃなくて、遊んだときのあるできごとをとり出して書けばいいなあと思います。そして時には、上木さんのように自分が働いたときのことや、家の人の働いている様子や、あるいはまた、家族との会話なども書いてほしいですね。休みの日が多い今の時期だからこそ、いっそう大事にしてほしい日記の材料です。それから、いろんな花がさき、新芽が出、生き物の活動が始まっている時です。そういう自然の変化にもびんかんに気づいて書ければいいですね。

— 13. —

②

す。日記を書き写したプリントを全員に配って、ぼくが作者に質問します。作者が答えたことを文にして黒板に書いていきます。こうして「くわしく書く」ということを授業しました。

その後、下にあるような一斉指導を行いました。できれば集団に共通の体験(このときは、ぼくが子さそりの標本でみんなをびっくりさせるという意図的な体験を設定した)をネタにします。「先生が教室に入ってきた時から〇〇君がワッと言ってびっくりしたときまで(10分もないと思う)のことを、しっかり思い出して……書いてみよう」とやるわけです。(場面の切りとりをこれで教えることができます。) 書き終わったあと、お互いの作文を読み合いました。そして、比較的目標を達成している作品を使って、再度展開的過去形の文章の書き方を学習しました。

以上、指導のほんの一例を紹介しました。たとえば、書き出しを指定してつづきを書くというのもいいでしょう。「先生が教室に入ってきた」とか「『このはこ何やと思う』と、先生はにやにやしながら言った。」と書き出すと、順序よく思い出して書けるわけです。それを「今日、先生がこさそりを持って来てみんなをびっくりさせた。」とやってしまうと、あとは「おもしろかった」としか書きようがない。そのへんのところを具体的につかませたいものです。

場面を切りとることは取材指導の中で押さえていきましょう。「サッカーをしたこと」ではなく、「シュートがはずれてくやしかったこと」というように焦点化し、場面を明確にしていきます。それでもなお内容についてはあまりねうちのないネタが続くかもしれません。その点は次回にふれますが、しばらくは展開的過去形の記述指導にしぼって子どもの文章につきあえばいいかと思います。

1988年5月7日(土) No.13

野辺菴

天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人 / 草尾佳秀

くわしく書くというのは しっかりと思い出して 順序よく書くことなんだ
―「こさそりの標本」のこと―

びっくりこさそり

吉来雅子

※題名にくふうがある。

「あのはこ何かな、まさかおかしじゃないし」

朝会が終わって気が付いたのが、先生のつくえの上のはこだ。やがて先生が入って来たが、何も言わない。なぞのはこのしょうたいは、わからないままだ。

※こういう書き出しが読み手をひきつける。

一時間目は国語で、作文の勉強だった。わたしは、なぞのはこのことを言うかもと、ねっしんに先生の話をきいていた。

「あっ、あのはこや」

わたしは、ごくんとつばをのんだ。先生は少しにやにやした顔で話し始めた。

※話し言葉を言った時の表情や様子をよく思い出している。他の話し言葉のところも。

「このはこ、何やと思う」

みんなは、

「おかしやろ」

と、やかましく言った。

「作文かー」

と、一人が言った。そのこえにひっぱられるように、みんなも、

「作文かー。本当のこと言ってよ」

という顔を先生にむけた。先生は、だいじょうぶかなあといった感じで、それでもにやにやしながら、

「ふた、あけようか」

と言った。

ふたに手がのびた……。中からは白い紙が出てきた。一しゅんみんなはしーんとした。

※こさそりの標本が出てくるまでのところで原稿用紙に一枚半。しっかりと思い出しているから、書けるのだ。このあとも一枚半ほどある。

24

人の世に熱あれ 【No.63】1994．11．14（月）
編集&発行：天理市立[redacted]小学校相談室

「生活綴り方事始め」（3）《ねうちのあるネタを》

①

1988年5月18日（水）№2
野辺花
天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人／草尾佳秀

日記抄　世の中のことにも目を向けて…

取材のはばを広げ、よりねうちのあるネタに目を向けさせるために

◎五月十三日　　　　粟飯原篤史

今日、夕刊を見ると一番はじめのところに『大陸渡るはず珍鳥が飛来・松山』と大きな字で書いてあった。よく見ると、「日本ですがたを見るのは珍しい野鳥『シベリアオオハシギ』が五月に入ってえひめ県に相次いで飛来している」と書かれていた。写真を見るとだいたい色でくちばしが長くて、尾の所らへんは茶色と黒がまじっていた。これがシベリアオオハシギだなあと思った。タイ・インドなどで越冬し、春にはぞうしょくのためにシベリアなどの寒帯へわたっていくそうだ。そんなにめずらしい鳥なのかなあと思った。すると四十七年に青森県で初めて記録されていらい日本では数えるほどしか観察例がないと書かれていた。めずらしいんだなあと思った。

▨そう言えば、五月十日から一週間、愛鳥週間だったですね。まさに時の話題だね。新聞やニュースから取材するというのも大事なことだ。世の中の動きにはびんかんでありたい。きのうの新聞には農家の人がつくる米のねだんが下がるという記事もあったぞ。社会科で勉強した農家の人の思いはどうなんだろう。

粟飯原君の書きっぷりはみんなにもまねてほしい。だんだんとくわしくしていく書き方、自分の新たな疑問に答えていく書きすすめ方。ぜひ取り入れたい。

◎五月十三日、十三日の金よう日　　　　吉川紫乃

今日は十三日の金よう日。わすれていた。どうして外国のが日本につたわってきたのか不思議です。外国ではいやな日、あくまのくる日とかいっても、日本にかんけいないのにちやほやする。どうして十三日の金よう日がだめかわからない。日本は何日↑何よう日というのはない。

▨日本というのは不思議な国です。世界中の宗教のある一部をあれこれ言うかと思えば、本気でその宗教を信じるわけでもない。〝迷信〟〝慣習（ならわし）〟にしばられてるんですね。そのことがどれほど多くの不幸をつくってきたかしれないのに。それについてはまた話をしたいと思います。

1988年5月25日（水）№26
野辺花
天理市立[redacted]学校5年1組
発行人／草尾佳秀

日記抄　『五年四組のイカダ』わたしもぜんそくがでます

新聞やニュース、読書も日記のネタに。

◎五月二十一日　　　　田宮奈津子

今日、わたしは、学校で草尾先生が「五年四組のいかだ」という本を読んでくれました。その本の中にはけんいちという男の子が出てきました。その子はぜんそくがきつくて、夏から秋にかけてよくぜんそくが出るそうです。運動会を一回しか出ていないそうです。わたしは、そのとき、出たいのに出られない時はかなしいだろうなあっと思いました。みんなは、楽しくしているのに自分はぜんそくになってしんどくなっているのは、かなしいと思います。わたしは、運動会を三回出ました。わたしもぜんそくが出ます。でも、あまりきつくはありません。でも、わたしにとってはとってもいやなかぜです。ぜんそくをひくと息が苦しくて、歩くのがすごくしんどくなります。ねていたら、よなかに六回ぐらいおきます。ちょっときつい時は、げをはきます。わたしは、けんいちという子がすごくかわいそうです。

（主述の関係バラバラだけど、気にしないでください。）

▨唐沢憲一君は、夏の間ぜんそくに苦しめられ、運動会にも五年間にたった一回しか参加できなかったという。その唐沢君がぜんそくの発作とたたかいながら、同じように病気かなんかでその年の運動会に参加できなかったクラスのなかまのことを心配していたというのだ。これを〝やさしい〟という一言でかたづけてしまっては、何かちがうように思うのだけど、それにしてもなぜこれほどまでに心がすき通っているのだろう。苦しみや悲しみを持つ者だから、他人の苦しみや悲しみに心がとどくのだろうか。それもあるけど、決してそれだけではないだろう。ぼくらは、病気の時にはとびきりのわがままになってしまうし、悲しい時には自分ひとりが不幸をせおっているように思ってしまう。

田宮さんの日記を読んでいて、ぼくは唐沢君と同じ〝やさしさ〟を見る思いがした。自分も同じようにしんどいのに、私より憲一君はもっとしんどいだろうからかわいそうだと言える田宮さんの心がすてきだと思う。

児童文学が子どもの目を開いてくれることもあります。読み聞かせも積極的に。

②

1988年 5月26日(木) No.28

野辺花

天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人 / 草尾佳秀

ぼくの言いたいこと
▨の部分を読んでね。
じつはこのころ、「離婚」の日記がぼくの手元にあった。これについてはまた後日。

日記抄

クラスのなかまのことをもっと知りたい!!

『五年四組のイカダ』の感想より

⊠五月二十日 『五年四組のイカダ』 吉来雅子

何日か前から先生に「五年四組のイカダ」という本を読んでもらっている。わたしはとってもいい本だなと思った。五年四組の人はいろんなことをしながら、少しずつ少しずつ一つにまとまっていっているようだった。人のことをよく知り、いっしょに楽しんだり悲しんだりするってことは、とってもいいことなんだなと思った。わたしには、そのことがまだできていなかった。クラス全員のことをよく知りたいと思う。そしてクラスが一つにまとまってほしい。

⊠五月二十日 「五年四組のイカダ」の感想 吉川紫乃

あけべ先生って草尾先生ににてる。私らも五年四組の子といっしょで四年生までは、朝の会で国語かかりとかがもんだいをしてもんだいのこたえあわせをやったりしていた。でも、草尾先生になってからそんなことやらんでいいし、はやく終わったらしゃべれるからスッとした。わたしが前のクラスのとき、朝のもんだいしいひんこがいた。そして学級会でなんどもはなし合っても、いっぱいしてないこいるのに、学級委員さんがいうと一人しかやめてほしいという子がいない。みんないいかっこばかりしている。私もそうだ。いやなのにいいかっこしようと思ってやらなければならない。私もやめてほしいにて手をあげたらいいと思う。この本、わたしらのことがかいてあるみたい。病気の子もいないけど、もしかしたら、ほんとうのお父さんやお母さんとちがう子もいるかもしれない。

▨三十三人の子がいれば三十三通りの人生がある。中には人には言えない重い荷物をせおいながら学校に来ている人もある。ぼくらは、他人の人生など知らずに生きていくこともできるし、他人の人生を自分の人生の一部として生きることもできる。荷物をかわりに持つことはできない。でも、重い荷物を一緒に持つことはできるように思う。ぼくらがこの本から学んだのは、そのことだ。となりの席にいるのはあの本の登場人物かもしれないという、まえがきの一節を心にきざんでほしい。

"ねうちのあるネタ"という言い方は好きな表現ではないが、生活の何に目を向けさせようとしているかという内容から解釈してください。

1988年 5月26日(木) No.29

野辺花

天理市立[redacted]小学校5年1組
発行人 / 草尾佳秀

西嶋くんの日記、次のページでカレイに変身します。

日記抄

五月二十四日の巻(まき)

一挙三本立て
。外できゅう食
。さか上がりの練習
。学校から家までは何歩?

⊠五月二十四日、外できゅう食 稲田宮子

今日、四時間目の終わりごろ、カラーという花を植えに行きました。そして、植え終わった後、先生が、「すきなところいって遊んでいいで。でも、運動場には行ったらあかんで」と言いました。そんな時、吉川さんが、「外できゅう食食べよう」と言いました。すると先生が、「そうしようか」と言ったので、みんなよろこびました。わたしもうれしかったです。みんないそいで教室にもどりました。そして、何分かたって、だれかが、「おくじょうにしゅうごう」と言ったので行きました。外はあつい今日にはさいこうのすずしさでした。でも、ほこりがはいりそうで心配でした。わたしはハンカチでほこりがはいらないようにしました。わたしは、逢立さんと吉岡さんと食べました。わたしは、このおくじょうでのきゅう食は、二階堂小学校の思いでにいいなあと思いました。

⊠五月二十四日、さか上がりの練習 西嶋寿糧

今日の夜思い出したようにお母さんに言った。「明日、スポーツテストや」お母さんは、「あほやな、もっと早よ言うといたらよかったのに」それから小林の公園に行きました。なかなかできません。そしてお母さんが「じょうそうしい」と言った。「よし」と思った。じょうそうしてやった。おしいところまでいったが出さない。そしてコツをおぼえた。だいぶおしいところまでやったがやっぱりできない。それからぼくは言った。「明日、がんばるから」と言って帰った。

(結果は、できなかったそうです。努力がかならずしもむくわれるとはかぎらない世の中の非情さを知ったのでした。まあ、ええやんか…T)

⊠五月二十四日、学校から家までは何歩? 佐々木麻孝

今日、ぼくのしらべたところ、一七五〇歩ぐらいだった。(学校まで)これも一七五〇歩ぐらいだった。(家まで)みんなはどれくらいありますか?

▨通学路もこうやって歩けばけっこうおもしろくなりますね。このごろみんなの日記がたのしくなってきた。西嶋君のなんか最高。ステキな詩になりそうな日記です。